

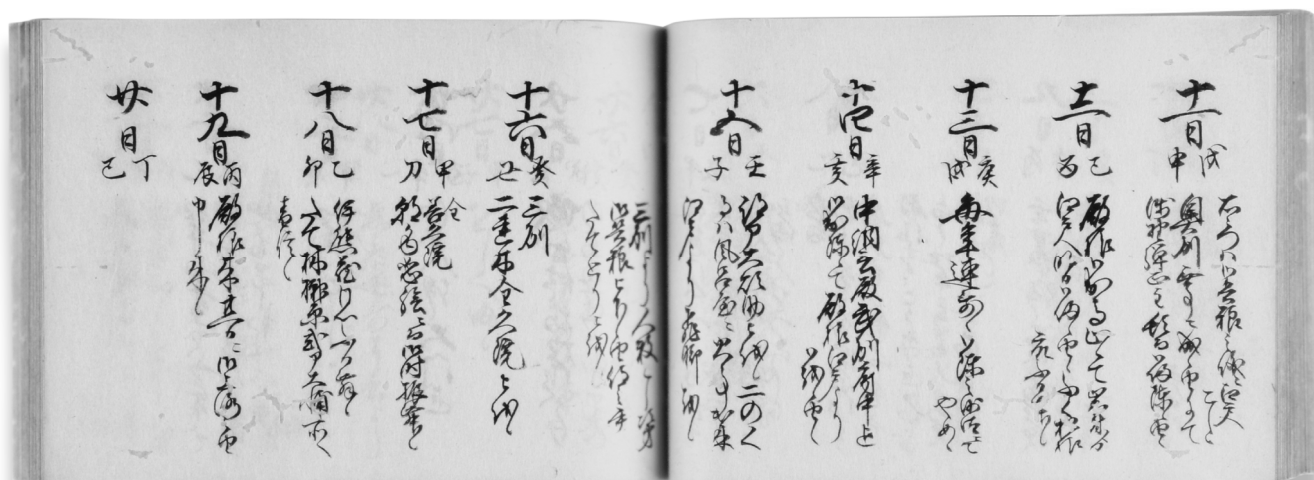
ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより



al museo
2017年9月20日

No.121



天正 19 年正月 14 日、家康と羽柴秀次、府中で対面（『家忠日記』本館蔵）

もくじ

- 1-2 徳川御殿@府中
その式…府中御殿での閣僚会談
- 3 最近の発掘調査
馬場大門のケヤキ並木の下を発掘しました
- 4-5 NOTE さよならプラネタリウム投影機 GL-AT
- 6 たまがわ野鳥セレクション
⑥元祖水辺のハンター サギ
- 7 展示会案内
企画展 ちよっとむかしのくらし～その2～
- 8 開館 30 年を迎えての…あれこれ
②郷土の森がホンモノの森になった！

徳川御殿@府中

徳川將軍家は、鷹狩などの際に休憩・宿泊する御殿を各地に設けていました。その一つが府中御殿です。長らく古記録や伝承でしか知ることのできない御殿でしたが、近年の発掘でその存在が実証されました。この御殿を取り巻く話題を 4 回シリーズでお届けします。

その式…府中御殿での閣僚会談

府中御殿の成立は戦国の世が終わりを告げた天正 18 年（1590）。家康が江戸へ入府して間もなくのこと。豊臣秀吉が天下人として覇権を広げている時期でした。実は、鷹狩の休憩・宿泊施設となるのはしばらく後のことで、当初は政治的な場としても利用されていたようです。

徳川御殿@府中

その式…府中御殿での閣僚会談

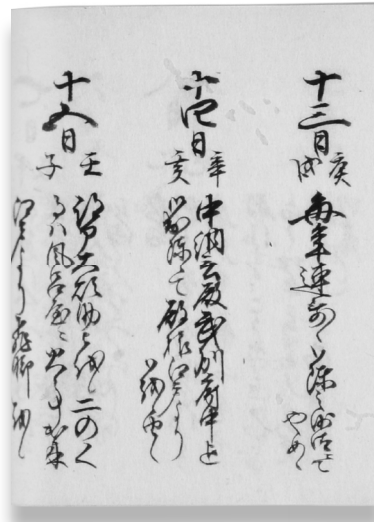
徳川將軍家は、江戸近郊の各所に御殿やそれに準じる施設を設けていて、3代將軍家光の頃まではそれなりに利用されていました。小規模なものもあるため、その数は明確ではありませんが、青戸御殿（葛飾区）、品川御殿（品川区）、小杉御殿（川崎市）、神奈川御殿（横浜市）、中原御殿（平塚市）、鴻巣御殿（鴻巣市）、越谷御殿（越谷市）、船橋御殿（船橋市）、御茶屋御殿（千葉市）、東金御殿（東金市）などが主なところでしょうか。

さて、こうした御殿は、もちろん鷹狩の際の休憩・宿泊のための施設でした。その造営については必ずしも根拠となる史料が揃っているわけではありませんが、文禄2年（1593）から寛永12年（1635）の間、なかでも慶長年間（1596～1615）の後半に集中します。

ところが、府中御殿の造営は、豊臣秀吉が小田原北条氏を滅ぼし、徳川家康に江戸への転封を命じて間もない天正18年（1590）7月、小田原北条氏を滅ぼして奥州へ向かった帰路の秀吉を饗応するために、家康が建造したのだと伝えられています。他の御殿に比べて格段に古いのです。最近では、秀吉自らが「御座所」として建造させた可能性も指摘され、建造者を巡る新たな議論も生まれています。家康が秀吉かはとても大きな問題ですが、それはひとまずおいて、ここではまだまだ動乱冷めやらぬ豊臣政権下において、府中御殿が建造されたことに注目しておきたいと思います。

やがて秀吉が亡くなると、家康は徐々に権力を手中に収め、慶長8年（1603）には征夷大將軍に任じられ、慶長10年に秀忠に將軍職を譲ってからも大御所として君臨しました。こうして成立した徳川政権下において、府中御殿は將軍家の御殿として、鷹狩などの休憩・宿泊施設として利用されています。

ようするに、府中御殿は、豊臣政権下に出来、徳川政権に継承されているのです。これを前期・後期と呼ぶとすると、後期の性格は他の御殿と基本的に共通するのですが、前期の性格は府中



『家忠日記』天正19年正月13～15日部分
（江戸時代写本 本館蔵）

（前略）
十四日 亥辛 中納言殿武州府中迄
御出陣候て、殿様江戸より
御越候由候
（後略）

御殿固有のものとなり、その解明は大きな課題といえます。

この課題に示唆を与えてくれる史料の一つが、表紙と上に掲げた『家忠日記』です。『家忠日記』は家康譜代の家臣であった松平家忠の日記で、天正5年（1577）から文禄3年（1594）の記事が残っていて、時局を知ることができる史料です。

この日記の天正19年正月14日条に府中が登場します。「中納言」は秀吉の甥の羽柴秀次、「殿様」は家忠の主君である家康です。小田原北条氏を滅ぼした秀吉は続いて奥州も平定するものの、その後不穏な情勢となり、家康と秀次に出陣命令が出されます。ところが、これは誤報として処理され、奥州へ向かう途中の秀次は、正月14日に府中で家康と対面となるのです。この頃の家康は豊臣政権における関東・東北地方を担当する政治勢力として位置づけられ、秀次はまだ秀吉の厚い信任を得ていました。豊臣政権のいわば閣僚級の会談が行われたといつてよいでしょう。

建造者が誰かはともかく、秀吉の奥州からの帰路に当たっているからこそ、府中に御殿が造られたのでした。江戸を経由しない北関東・東北への道、その要衝としての府中の存在が浮かび上がります。豊臣政権下の府中御殿は、政治性の強い施設でもあったと考えられます。（深澤靖幸）

馬場大門のケヤキ並木 の下を発掘しました

宮町二丁目 府中市ふるさと文化財課 塚原二郎



ケヤキ並木の発掘

京王線府中駅の西側に立派なケヤキの並木が約 600m にわたって続いています。この並木は「馬場大門のケヤキ並木」の名称で国の天然記念物に指定されています。この並木のできた経緯には源頼義・義家親子の伝承などありますが、いつごろからケヤキ並木があるのかよくわかっていません。

今回、このケヤキ並木で初めて本格的な発掘調査を実施しました。調査面積は約 12 m²と僅かですが、ケヤキ並木の地下がどのようなになっているか、若干の情報を得ることができました。

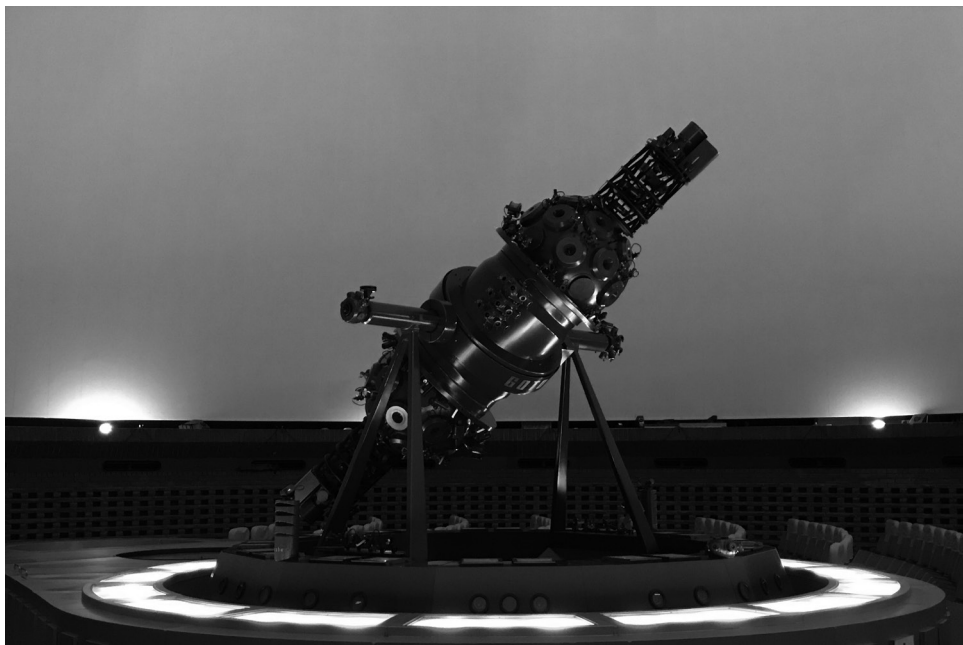
発掘調査は、一辺約 1.2m の方形の調査坑を 8 か所設けて実施しました。このうちの北寄りの 2 か所では、南北方向の溝が道路跡と一緒に見つかりました。この溝から中世（鎌倉・室町時代）の陶器が見つかったため、溝は中世には埋まったものと考えられます。溝が埋まった後にケヤキが植えられたとすると、中世頃にケヤキ並木の原形ができた可能性もあります。

また、この溝の埋め土からは、土錘がまとまって 8 個出土しました。出土状況からすると、おそらく調査坑の外側にもまだ埋まっていると考えられます。今回の土錘出土地点から東北東に約 270m の地点でも、竪穴建物跡から 188 個の土錘が出土しています。この土錘はその出土状況から投網のような漁具の錘として使われたものと推定されています。今回の土錘も類似する事例と考えられますが、どのような経緯でケヤキ並木に埋まってしまったのでしょうか。埋まりかかっている溝に落としたのか、または、捨てられたのか。もしくは、六所宮（現 大國魂神社）の参道の脇に埋める儀礼のようなものなのでしょうか。

今は、これ以上の想像はなかなかできませんが、今後この周辺の調査が進み更なる発見があれば、その理由もわかるかもしれません。



まとまって出土した土錘



プラネタリウム投影機 GL-AT

▼ はじめに

1987年4月に府中市郷土の森博物館がオープンし、当時平面床のドームとして日本で一番直径の大きなプラネタリウムも誕生しました。それから30年が経過し、当館より後に開館した多くのプラネタリウムがリニューアルする中、時代に合わせたスタイルを取り入れつつ、古い機械を大切にしながら、投影してきました。

▼ プラネタリウム投影機 GL-AT

当館の投影機は、五藤光学研究所が製作した、GL-ATです。映し出す恒星数は12,000個、太陽・月・惑星、くじら座のミラ・ペルセウス座のアルゴルなどの変光星、天の川、アンドロメダ銀河などの星雲星団、星座絵などさまざまな投影機が本体に同架されています。また、4つの軸を回転させることにより、時間を進めたり、戻したりすることで、星の動きや好きな時間の星空を再現することができます。機械は、手動操作に加えて、コンピューターでプログラムを組んで自動で動かすことができます。

▼ プラネタリウム投影形態の変遷

開館当初のプラネタリウムは、すべてのプログ

ラムがコンピューターに組み込まれたオート番組を投影していました。番組に使用するさまざまなスライドや、70mmフィルムの全天周映像などが自動で映し出され、解説の音声も録音による固定化されたものでした。

しかし、この方式だと番組の前半で紹介する季節の星空解説は、日々変わらない星座の位置で一定期間続くことになります。月も出ず、惑星の位置も変わらない同じ星空では、さまざまな天文現象を紹介することができませんでした。そこで、1990年度の春番組から、投影当日の星空と天文現象を臨機応変に紹介できる、生解説による星空案内に切り替えました。

これを機会に、生解説+全天周映像での番組も試みましたが、スライドの静止画では表現しきれない迫力のある動きは提供できたものの、経費上の問題で長続きはしませんでした。

▼ 全天デジタル投影システムの導入

その後、利用者が減少する時期もありましたが、2007年にビデオプロジェクターによってドーム全体に映像を映し出す全天デジタル投影システムを導入しました。これにより、映像によ

る恒常的な投影が実現し、利用者を大幅に増やすことができたのです。その後現在に至るまで、安定した利用者数を維持してきましたが、機械や座席などの老朽化が進み、メンテナンスも難しくなってきました。

最新のプラネタリウムは、小型化し 1000 万個以上の星を映し出すことができるようになっていきます。天の川も美しく再現され、観覧者の視界も広く確保されるなど大きく進歩しています。当館でも新しいプラネタリウムに生まれ変わるため、2017 年 10 月 9 日を最後に、今のプラネタリウムを閉室し、リニューアルすることになりました。新しいプラネタリウムでは、どんなことを目指しているのでしょうか。

▼ Fuchu= 宇宙

「府中 (Fuchu)」という文字をよく見ると、「宇宙 (Uchu)」が隠れていることに気がつきます。この「Fuchu には Uchu がある」を新しいプラネタリウムのキーワードにして、星や自然と関わる新たな府中の魅力を発見し、郷土の森博物館ならではの空間を作り上げたいと考えています。また、府中市内にある天文・宇宙に関係する企業や団体と市民の皆さんをつなげ、ふるさと府中の魅力を発信していく予定です。ここでは、その一端をご紹介します。

▼ 新しいプラネタリウム

今回のリニューアルでは、投影機 GL-AT に代わり、最新型のプラネタリウムが導入される予定です。より本物に近い高精細で美しい星空と、宇宙空間などの迫力ある高解像度全天デジタル映像をリアルに再現できるようになります。このことにより、これまで以上にあらゆる世代のニーズに応えられるようになり、星や宇宙に対する興味・関心を高めることができるものと考えています。また、設備面でも次のように新しくなります。

①座席：座席は、今よりもゆったりと座れるようになり、レスポンスアナライザー（個別回答器）が設置されます。レスポンスアナライザーを使うと、投影中に出題されるクイズなどに回答することができます。観覧者の興味や意見をリアルタイムに映像に反映することで、従来の「見る」プラネタリウムから「参加」するプラネタリウムへと生まれ変わります。

②床：床には、新しく「聴覚障害者用補聴シ

ステム」を全域に導入しますので、聴覚障害のある方にもお楽しみいただけるようになります。

③スクリーン：星空や映像を映すドームスクリーンも 30 年の経過とともに、汚れなどが目立ってきたため、全面張替えを実施する予定です。ドーム映像に特化した真新しいスクリーンによって、より美しい星空と映像をお届けできるようになります。

④プラネタリウム室内ステージ：プラネタリウム室内に、新たにステージを設置します。ステージを利用した星空コンサートや講演会など、空間をいかしたイベントも行う予定です。

▼ 新しい投影プログラム

投影プログラムは、プラネタリウム機能を最大限にいかし、オリジナル番組を後述の 3 つの対象別に分類した番組枠（種類）で制作します。プログラム名は現時点では仮称ですが、新たに設定する番組枠は「星空の時間」「こどもの時間」「映像の時間」の 3 種類です。

①「星空の時間」：郷土府中から見上げたその日の星空の楽しみ方や、旬な天文・宇宙の話題を解説員がわかりやすくご案内し、美しい星空をたっぷり体験できるようになります。

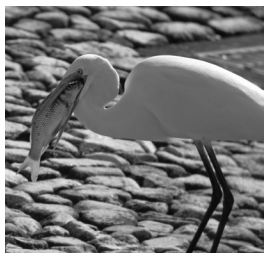
②「こどもの時間」：子どもたちが解説員との掛け合いの中で、星座探しや宇宙旅行を楽しみながら疑似体験できる内容を中心にご用意します。遠い宇宙が少し身近になるような、星や宇宙を好きになってもらえるプログラムです。

③「映像の時間」：ドームスクリーンならではの美しくダイナミックな映像や、最新の科学や天文の話題を扱った、質の高い選りすぐりの映像作品を数か月毎にお送りする予定です。

▼ おわりに

プラネタリウムは 2018 年 5 月上旬までお休みになりますが、リニューアル後は、プラネタリウムの多彩な魅力を広く市民の皆さんにお伝えし、皆さんの「にぎわいの空間」となるようにしたいと考えています。新しくなるプラネタリウムに、ぜひご期待ください。

やまが野鳥せくしょん



⑥一元祖水辺のハンター—
サギ

エサを捕えたダイサギ

カワウ、ユリカモメと、多摩川に増殖・侵攻する水辺のハンターを紹介してきましたが、以前から多摩川を採餌場として活動する大型の野鳥と言えばサギの仲間でしょう。スラ〜っと伸びるS字カーブの首に細い足、そして長い嘴と、遠目から見ればまるでツルのようにも見えます。サギの仲間は、極地以外に約70種が分布し、日本ではダイ（大）サギ・チュウ（中）サギ・コ（小）サギをはじめ19種が知られています。多摩川中流域では、一年中見られるダイサギ・コサギ・アオサギがポピュラー。これに夏に渡って来るチュウサギやゴイサギが加わります。白い羽毛に覆われた大・中・小のサギは、河原には昼間に訪れ餌を探します。アオサギは夜も採餌行動を取り、ゴイサギは夕刻から朝方までの活動がメインです。サギの中でうまく餌採りの時間割が出来ているかのように。魚をはじめ



アオサギ

水辺の生きものたちにとっては、昼夜問わず警戒を要するかなりやっかいな連中でしょう。サギは餌採りで常に水と接しているにも関わらず、他の水鳥にあるような、水を弾くための脂を分泌する器官（尾脂腺）がありません。その代わりにあるのは、胸部にある一生抜け替わることのない羽毛です。粉綿羽と呼ばれるこの羽毛の先端は、度々崩壊して微小な角質の粉末を作ります。サギはこれを全身に塗ることで防水処理を施しているのです。水際を歩いて獲物を狙い、水中に潜ることがないゆえの特徴なのでしょう。

多摩川のハンターとは言え、元来水田や小川などが重要な狩場で、魚や両生類、爬虫類、時には哺乳類や鳥類まで狙うこともあります。その際、餌を捕えて巣に運ぶ途中、吐き出してしま

ことがあるようです。小魚やオタマジャクシなどが路上に散乱する様子は、水田近くでは見慣れた光景ですが、初めて見る人たちには不可思議に映るのでしょうか、新聞などで怪奇現象の記事にされたこともあるようです。

彼らの巣は見晴らしの良い高木に木の枝を組み合わせて設け、松林や竹林でコロニー（集団繁殖地）を形成することで有名です。コロニーは特定の種でまとまることもなく、同じ樹木にダイサギとコサギが巣を形成することも珍しくありません。コロニーは天敵から身を守るため河川敷などを選ぶことが多いのですが、個体数の増加から寺社林などを利用する傾向もあり、その場合は糞害などの問題が生じています。このような繁殖地はサギ山として知られ、かつては国の天然記念物に指定されていた場所もありました。1952年に特別天然記念物に指定された埼玉県浦和市（現さいたま市）野田のサギ山です。1960年頃で市の面積中34%が水田と言う条件と、竹林・松林が充実していたことで、当時3,500を越える巣が確認されています。65年以降竹は枯れ、営巣数は半減、近距離の林に移るもすぐに姿を消してしまいました。高度経済成長期に入って、人間社会の生活体系が大きく変化したことで、長きに亘って続いた野田のサギ山は繁殖地としての利便性を失い、消失に至ったのです。

東京の鳥類調査を見ると、増加や分布拡大が顕著なカワウとまではいきませんが、サギ類を中心とした水辺の鳥の繁殖数は増えているようです。河川改修などで水辺環境が改善された結果、一旦は身を引いていた仲間が戻って来たものと考えられます。現にコサギでは70年代に一桁だった繁殖場所が90年代に入って50か所を越える勢いでした。本来の生活圏であった水田や、近隣の林から、河川への依存度が再び増したのかも知れません。都市化により水田は激減し、サギ山となる繁殖場所も分散する時代に、多摩川のような都市河川が、彼らにとっては大変有難く貴重な環境になっているのです。但し、新たに侵攻してきたハンターも混在する多摩川の現状では、いささか餌採りのライバル多しで、以前に比して戸惑う場面もあるのではないのでしょうか。都市環境の変化が続く限り、サギがどのように対応して行くのか注目したいところです。（中村武史）

企画展

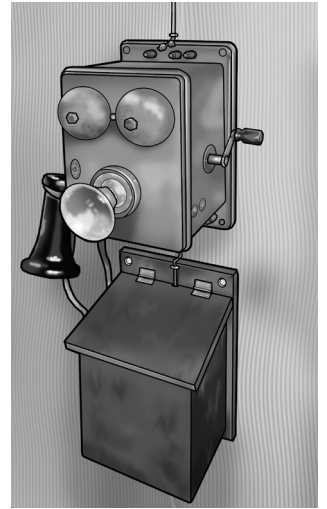
ちょっとむかしの暮らし ~その2~

11/11 (土) ~ 3/18 (日)

会場：本館 2 階企画展示室



600 形電話機（黒電話）



デルビル磁石式電話機

当館の所蔵資料のなかには、「デルビル^{じしゃく}磁石式電話機」があります。側面にあるハンドルを回して発電し、信号を電話局に送ると、電話局の交換^{こうかん}手につながります。交換手に電話番号を伝えて、はじめて通話先へつながる（先方のベルが鳴る）仕組みです。府中では、電話がはじめて開通した大正 2 年（1913）から、交換手の手を経ないよう^{しゅ}に自動化された昭和 33 年（1958）ころまで、この電話機がつかわれていました。

これを見て「アニメ映画の『となりのトトロ』に出てきた!」と喜ぶ人もいます。しかし、形は似ていますが、同じものではありません。映画に登場するのは、この機種^{しゅ}のさらに改造されたバージョンなのです。形状も一部異なっており、電話番号を回して入力するためのダイヤルがついています。このことから、『となりのトトロ』は、電話交換が自動化され、ダイヤル式の電話機に移行しつつある日本が舞台と考えられます。つまり館蔵の電話機は、『となりのトトロ』の世界観のさらに一世代前のものである、とも言えるのです。

電話機はその後さらに改良が加えられます。徐々にダイヤル式となり、黒電話と呼ばれるものが主流になっていきます。プッシュフォンが普及するまで広く使われていた「600 形」（本館常設展示室および体験ステーションで展示中）の黒電話は、公衆電話を除けば、ダイヤル式電話機としてほぼ日本全国に備えられていた機種です。

ところで、「電話のダイヤルを回す」と聞いて即座^{そくざ}にその意味を理解できるのは、ほとんどが昭和以前の生まれの方ではないでしょうか。現在では携帯電話もスマートフォンが主流になり、電話からボタンすら消えつつあります。ダイヤルの次世代にあたる「プッシュフォン」という単語すらあまり使われなくなっているように思います。そのため、ダイヤル式電話は、もはやなつかしい道具となっています。

平成もまもなく 30 年になろうとしています。ですが、こうした電話機が普及してからは、100 年たっていません。そんな短期間でも、人びとのくらはは激変し、くらしの道具類も変化し続けています。ゆえに、私たちが「ちょっとむかし」と考えてしまう数十年前のくらしでさえ、なつかしい、と思える人と、まったく知らずにかえって新鮮に感じる人がいます。紹介したとおり、電話機だけでもこうなのですから、くらし全体の移り変わりはなおさらでしょう。

そこで今回も、ちょっとむかしにつかわれてきた生活に関する道具類の変遷やつかい方を、収蔵資料を通して振り返っていきます。ここで紹介した電話機ももちろん展示予定です。昨年度に続く第二弾の展示会として、前回と同様、常設展示室「変わりゆく府中」および「体験ステーション」のなかの、むかしのくらしを紹介するコーナーとあわせてお楽しみください。（佐藤智敬）

開館 30 周年を迎えての…



②郷土の森がホンモノの森になった！

郷土の森博物館は、その名のとおりの森の部分を含めた施設です。園内には府中の段丘地形を模し、復元建物を配し、郷土府中を丸ごと体感出来る仕組みになっています。そしてこれらを包み込むように、市の花「梅」をはじめとする、様々な樹木・草本が植栽され、まさに郷土の森を構築しています。今回は園内植生の30年を取り上げてみましょう。

博物館の土台になっているのは多摩川の河川敷です。すなわち掘ればすぐ砂利の敷地に大量の土を盛って造られています。ここに多数の樹木を植栽して、ある部分は市の北東部に構える浅間山の雑木林、ある部分は市の中心部を飾るケヤキ並木と言った趣向を凝らしています。さす

がに開館当初の木々に樹勢は無く、本館前のケヤキ並木などはとても根付く兆しも見られないまま、樹



博物館本館前のケヤキ並木

幹には包帯が巻かれている始末。ほかの樹木も葉の出ない枝ばかりが目立つ有様で、とても森とは形容しがたい景観でした。

自然の適応力・再生力には感心させられます。10年程を経過した園内には、青葉繁る木々が充実し、梅をはじめとする季節毎の花々も数種類ずつ安定して咲くようになりました。生態系の理屈として、底辺の植物が安定する場所には昆虫が増えてきます。そしてその昆虫を目当てに野鳥が入り込めます。こうしていわゆる食物連鎖のピラミッドが出来上がるのです。論より証拠で、この頃から園内には野鳥種が豊富に見られるようになりました。園内で野鳥観

察会を始めたのも丁度この時期です。やっと森になった園内ですが、ここから先が問題でした。

市街地に造られた人工の森は、ひとつの生態系を成すようになりまして。郷土の森博物館としては願ったり叶ったりですが、充実した森の良い所が、公共の施設ゆえに不都合な事象を生み出したのです。まずは、成長した樹木の混雑です。樹間に余裕のない木立が形成され、高木からは相当量の枯葉が近隣住宅などに分散し、苦情の種となっているのです。近隣農家への日照問題も度々です。

近年は動物被害も増えています。雑木林に生息する昆虫では、特に夏場のスズメバチが要警戒です。本来の生息域が減少し、都市公園や人



30 年前（左）と今（右）

工植栽地に増え、飲み残したジュースの空き缶などは絶好の餌となっています。また、カミキリムシによる復元建物の被害も少なくあ

りません。春先にトラップを仕掛け、巣も毎年駆除し、樹液の多い木は伐採するも、根絶は不可能です。野鳥では留鳥から渡りまで、珍鳥さえ姿を現す好環境ですが、多数のカラスが営巣場所として利用します。繁殖期には雛を守るため、来館者を襲う危険もあり、巣の撤去を含めた枝落としなどの作業が絶えません。さらにはタヌキや、外来種のハクビシンまでが入り込み、生物には好環境この上ない森なのですが、周辺住民や来館者のリスクは増える一方なのです。今後は抑制を念頭に、園内植生を都度部分部分でリニューアルしていくことが優先課題と感じています。（中村武史）